
ですっとダンス

月乃怜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ですつとダンス

【Nコード】

N3501W

【作者名】

月乃怜

【あらすじ】

ですつと団のメンバー、一護・ルキア・ウルキオラは真剣に考える。

――この事件の糸口はなんだ？――

三人が必死に考えていたのは 教頭のカツラを勢い余って取ってしまった、いかに自然に元に戻るか。

こんなしょうもない事件を次々と起こしては解決して行く。
ときには生徒会も加わって大波乱！！

スケツトダンスを基にした敵味方関係ないゆるーいオールキャラ学園コメディです。よければお越しください！

（感想の制限をなくしました。誰でもお書きください！）

設定（ 随時更新 ）（前書き）

このストーリーの設定です

設定（ 随時更新 ）

ですつと団

黒崎一護…ですつと団リーダー

喧嘩が強くて不憫で苦労性

基本突っ込み役

朽木ルキア…白玉とウサギが大好き

よく一護に奢らせる

かわった口調でしゃべる

ウルキオラ・シファア…トマトが大好き（分かる人にはわかるかも）

基本ボケ役

よく一護とルキアの写真を流出させてる

浦原喜助…ですつと団の顧問

あまり出番がない

化学室で変な薬作ってる（被害者一護）

生徒会

市丸ギン…生徒会会長

サボリ癖がすごい

干し柿生きがい。学校の裏でもこっそり作っている。

日番谷冬獅郎…生徒会副会長

ギンのサボリ癖に頭を抱えている

一護とは話が合う様

井上織姫…マイペース

味覚が個性的

発想がユニーク

伊勢七緒…苦勞人

会長でも書類でビンタする

メガネをはずすと怖い

綾瀬川弓親…ナルシスト

目のひらひらが気になる

美しいもの大好き

その他

阿散井恋次…一護とは悪友

誰よりも不憫

サッカー部のキャプテン

檜佐木修兵…海燕と仲がいい

女子生徒に大人気

・黒崎家

黒崎一心…娘、息子、母溺愛の黒崎家の大黒柱でお調子者

黒崎医院の院長

黒崎真咲…黒崎家の中心

現在はカンボジアなどで医療の仕事をしている

黒崎海燕…黒崎家の長男

ブラコンでシスコンのしっかり者

黒崎遊子…双子の長女

すごいお兄ちゃん子

今は母の変わりに家事をしている

黒崎夏梨…双子の次女

一護と似た雰囲気を持っている

・朽木家

朽木緋真…ルキアの姉

大人しく、優しい性格

・シファア家

グリムジョー・シファア…ウルキオラの弟

兄に同じくトマト大好き

名前に無理がある

学年の組織

2 2…冬獅郎・井上

2 3…一護・ルキア・ウルキオラ・恋次

3 4…海燕・修兵・都

3 2…乱菊・ギン

数学教師…朽木白哉 ルキアとは義兄。緋真と結婚している

国語教師…藍染惣右介 メガネを取るとオールバックになり（心

が）オールバックになる

化学教師…涅マユリ 一護や恋次をやたら解剖したがる

体育教師…更木剣八 一護がお気に入りとの戦闘狂 眼帯を外すと

でかくなるとか

一 護くんの受難（前書き）

基本一話完結です

一 護くんの受難

一時間目：英語

一時間目から英語ってなんだよ。気分下がるわ。国語やらせる国語。

隣のルキアはさっきから

「私は日本人だ。英語など必要ない。」

とかぶつぶつ言ってるしょー。っーか怖いわ！

教師はこっちガン見してくるし、黒板爆破してくんないかな。

二時間目：体育

ちよつとまで、何だこの状況。

なんで俺、更木先生に追いかけてんの！？

更木先生には『絶対に気に入られてはいけない先生』という嫌な称号がある。

この称号がついている人は他にもいるが、俺はこの人だけで十分だと思うんだが…

「殺ろっぜー護オ！！」

って言ってるけどあんた一応教師だろ。教師がそんなこと言っているのか。

周りの奴らも見慣れたような目や、哀れな目で見えるな。

とりあえず助けてくれ。

三時間目：化学

これはやばい。命の危機だ。

涅先生も『気に入られてはいけない先生』の称号がついている。

涅先生がニヤニヤした顔でこちらに向かってくる！

待ってください、俺にはまだやり残した事があるんです。

遊子、夏梨、お兄ちゃんは今もうすぐ死んでしまうかもしれません。仏壇にはチョコレートと明太子を供えておいてください。

そう死ぬ覚悟を決めたとき、恋次がタイミングよく話しかけてきた。

先生の目が「こつちでもいいか」と光った。

俺はその隙を逃さず、その場を恋次に任せて一目散に逃げた。

「え？一護？」

「ちょっと君、手伝ってくれないカネ？」

「あ、え？いや、俺は……」

「いいじゃないカ！こちらに来タマエヨ！」

あぎゃああああああああ

そのあとの恋次の叫び声は聞かなかったことにした。

四時間目：数学

数学は結構すきだ。先生もまだ普通で分かりやすい。でも、やっぱりこの学園の先生わけで……

「では、この問題分かる者。手を挙げよ」

「先生」

「なんだ、分かったのか？」

「檜佐木くんが爆睡中です」

「……そうか、ならばしかたがない」

先生はカツカツと修兵の近くまで行き……

ガッ！！

メコツと机に修兵型の穴が開いた。

「グホっ！！??」

ありえない音が修兵の頭から響いた。

「起きたか。では、授業を再開するぞ。では檜佐木、この問題を解け」

「え、ちょ…分かりません…」

「これからはしっかり聞いておくように」

これだから朽木先生の授業は寝られない。

「さすが兄様……」

ルキア、お前はどこか変だ。

こんなことがつづくと身体も疲れきっていて。
おかげでぐっすり眠れる毎日。

……てか、これからもこんな日々続くの？

勘弁してくれ……

一 護くんの受難（後書き）

兄様動かしくっ！

うおお、小説書くのってこんなに大変なのか・・・

感想、文章構成、誤字脱字など、どんどんよろしくお願いします！

生徒会長のサボリ癖が酷いんですがどうしましょう（前）（前書き）

日番谷くんと乱菊さん登場です。

生徒会長のサボリ癖が酷いんですがどうしましょう(前)

PM3:00 ですつと団部室にて

生徒会副会長の冬獅郎が相談があると、部室にやって来た。

「ですつと団に少し協力してもらいたいことがある」

「珍しいな、生徒会からなんて…んで、用件は？」

「うちの会長、市丸会長のことでだ。」

そう、深いため息をつきながら言った。

「おい、大丈夫か？俺達でよければいつでも相談乗るからな？」

うんうん、とウルキオラとルキアが頷く。

「お前ら…いい奴だな…」

まあいい、それで用件というのは会長の弱みを握ってる奴を探して欲しい」

「それはまた…そんなに苦労しているのか？」

「伊勢も井上も綾瀬川も困っている」

「わかった。探してみるよ」

「すまないな。では仕事が溜まってるからこれで帰る」
「がんばれよ」

そういい、冬獅郎は帰っていった。

「一護、依頼はつけたものの、どうやって探すのだ？」

「そうなんだよな。」

「貴様何も考えず受けたな？」

「う…でもあのやつれた顔見るとなあ…」

うーん、と考え込む三人。

何かを思いついたようにウルキオラが口を開いた。

「そういえば、市丸会長には幼馴染がいたな。その人を使うというのはどうだ？」

「ああ、あの有名な乱菊さんか？」

松本乱菊といえ、この学校で知らない人はいないくらいだ。高校生とは思えないくらいにのびのびだが、本人はサバサバした親しみやすい性格である。

「聞けば市丸会長はその松本先輩に頭が上がらないという。」

「それはいい案かもしれんな！」

「ああ！それで行こう！」

3 - 2 教室にて

「あの、松本先輩は居られますでしょうか？」

「ん？おう、松本だな。おい！松本！後輩が呼んでるぞ！」

「え？あたし？はいはい」

乱菊はすぐにこちらに走ってきた。

「あたしに何か用かしら？」

「はい。あの、市丸会長の事なんですけど、あの人が全然仕事し

なくて生徒会の人達が困っているんですけど、なにかいい手はありませんか？」

「ああ、またあいつは……うーん、そうねえ……」

なになかったかと考え込む乱菊。

ん？と思い出したように言い始めた。

「あいつ、昔から寝相悪くてね、起きたら布団がひっくりかえってるわ、目が覚めると部屋からでて廊下で寝てるわで大変だったのよ。それが仇となって中学校の修学旅行でなぜか部屋が違ってたの所に來てたの。朝起きたらびっくりしたわ。隣でギンが寝てるんだもの」

笑い事でない気がするがそんな事があつたそうだ。

その後ギンは乱菊と同じ班だった女子に騒がれて修学旅行は大変居心地悪かつたそう。

「……女の敵だな！」

「いや、市丸会長も悪気があつた訳じゃないし……」

「少し同情する」

意見様々だが会長の弱みは聞き出せた。

生徒会長のサボり癖が酷いんですがどうしましょう（前）（後書き）

長くなったので後編につづきます。

生徒会長のサボリ癖が酷いんですがどうしましょう（後）（前書き）

前回の続きです。

生徒会長のサボり癖が酷いんですがどうしましょう（後）

ですつと団は生徒会室に向かっていた。

「しっかし、ウルキオラが居てよかったわ。俺等じゃ思いつかなかったと思うぜ」

「いや、言うほどでもない」

「むっ！貴様と一緒にするでない！」

「おめー、俺に勉強で勝ったことあったか？」

「貴様……」

一護とルキアの喧嘩が始まった。

いつものことなのでウルキオラは気にしていない。

「一護、ルキア、そろそろ喧嘩はやめろ。着いたぞ」

「あ、そうだな」

コンコンッ

「ですつと団です。失礼します」

「冬獅郎、見つけたぜ、生徒会長の弱み」

一護はニヤツと得意げに笑った。

「本当か！？」

「ああ。まあ、その方法を見つけ出したのは我が団唯一の理系だけどな」

そういいながらウルキオラに目配せした。

「これはちょっとかわいそうだと思うけどな」

そついい始め、話していった。
ようやく話し終わると、

「……そうか、ありがとな、ですつと団。これで会長に俺達と同じ苦しみを与えられる……」

冬獅郎は疲労が限界のようだ。思考が危ないぞ。

「おい、皆。今の話はしっかり聞いていたか？」

「はい、もちろんです」

他の二人もしっかり頷いている。

「では、明日この作戦を実行だ」

翌日

「なんやの、いきなり呼び出して。仕事せんでいいからってどういふことや？そりゃ嬉しいけど……」

ギンは状況が読めていないようだ。

「会長、貴方が仕事をサボりまくるから俺達はもう疲れたんだ。だから」

下克上だ」

「え？どういうこと……」

「会長、貴方はものすごく寝相が悪いそうですね」
ギンが理解していないまま、話を始めた。

「え、なんでその事知ってるん？」

「あんたの幼馴染に聞いたら、すぐに教えてくれたぜ？ついでに
中学校のときの事もな」

「ちよお、待って。それってもしかして……」

「ああ、あんたの幼馴染の布団にもぐりこんだことだよ」

「ああああああああああ！！！！もうやめたって……」

ギンは断末魔を叫び、冬獅郎は悪人面でトラウマを抉り出し始めた。

これではどちらが被害者で加害者なのか分からない。

「わかった！ちゃんとこれから仕事します！」

「会長、その言葉忘れないでくださいね。じゃあ、

これら全部会長のはんこが無いといけないんでお願いします」

「……え？これ全部？」

書類の山がいくつも出来ていた。

「私達、もう終わったんであとは会長だけですよ？」

「……はい」

泣きながら手を動かしていた。

ドアの外から聞いていたですつと団は

「…なんか冬獅郎が鬼に見えた」

「同感だ」

「生徒会には喧嘩を売ってはいけないな」

教訓：仕事はコツコツしていきましょう。

生徒会長のサボり癖が酷いんですがどうしましょう（後）（後書き）

オチってなんだ。

ギンファンの皆さんごめんなさい！だって動かしやすいんだもん（

ここまで読んでくださってありがとうございます！！

ヒーローになるにはどうしたらいいですか？（前書き）

ヒーローでお馴染みの（お馴染みか？）あの人です。

ヒーローになるにはどうしたらいいですか？

AM 8 : 0 0 昇降口にて

「お、一護おはよう」

「おお、ルキアか。はよ」

ほとんどの生徒がこの時間帯に登校してくる。

途中で出会ったウルキオラと合流し、下駄箱へ向かった。
一護が自分の下駄箱を開けると白い封筒が入っている。

「ん？なんか入ってるぞ？」

「なんだ？手紙のようだが・・・」

「もしかして、ラブレターか？案外貴様も隅に置けんな」

ニヤニヤしながらルキアが言うと

「オメーは親父か。えーっと・・・ですつと団に頼みたい事があります。放課後、中庭に来てください・・・だよ」

「なるほど。とりあえず中庭に行ったらいいんだな？」

「ああ。ん？まだあるぞ。P・S・スメルズ・ライク・バット・スピリッツ・・・」

なんか嫌な予感しかしねえ・・・」

「ああ、同感だ」

PM 2 : 3 0 中庭にて

「遅いな」

「まったく、自分から呼び出しておいて遅れるとは・・・」
二人ともご立腹の様だ。

「・・・二人とも、上を見る」

なにかに気づいたようで、ウルキオラは二人に言った。
ウルキオラに言われた通り、空を見上げると

「ボハハハハー!!」

人が空から飛ぶように落ちてきた。

ドスン!

「ブホォ!? ゲホッ・・・ゲッホゲホッ! ゲホッ!」

「「「「・・・」」」」

全員が言葉を失う。

そして依頼者、観音寺は三人を指差し、

「スメルズ・ライク・バット・スピリッツ!」

「「「「・・・」」」」

「なんか反応したまえよ!」

「いや、反応しろって言われても、どう反応したらいいか・・・」
もつともな意見だ。

「てゆーかなんで落ちてきたんすか」

「先生方から、学校でのパラシュートは禁止って言われて・・・」

「普通に歩いて来いよ!」

観音寺先生は歴史の先生でいつも奇抜な服装をしている。

先生には『気に入られても困る先生』の称号がついていた。

「で、依頼ってなんですか?」

これ以上放っておくと大変なことになりそうだと判断したウル

キオラが言った。

「ああ、私からの依頼内容はね、

私をヒーローにして欲しいんだ」

「はぁ・・・」

「私は街中で『あ！ドン観音寺だ！』とか『ヒーローよ！』とか言われたい！そしてあわよくば、女性と付き合いたい！」

三人は最後のが本音だろう、と思いながら力説している観音寺を見ていた。

「まあ、内容は大体わかりました。とりあえず、その服装から変えていきましょう」

「Why！？なぜだ！？」

「はつきり言いますと、ダサいです」

観音寺はかなり落ち込んでいる様子だ。

「わかった、変えよう。して、どんな服を着ればいい？」

「そうですね。スーツとか持ってないんですか？」

彼はナイスヒゲでワイルドっぽいから元はいいはずだ。

「ああ、持ってる。」

「あとサングラスも外してください」

「あ、はい」

完全に観音寺は下手に出ている。

数分後

「こんな感じでどうだ？」

そこに居たのはサングラスを外し、スーツを着こなしたワイルド

な男性だった。

「おお！いいんじゃないか？普通にかっこいいぞ！」

「いいと思う」

二人にも好評だ。

「ありがとう。ですつと団、この恩は忘れないよ・・・」

そういい、観音寺は街中を歩いてみることにした。
暇だったですつと団はこっそりついて行くことに。

街中を歩くとちらちらと振り返る人たち。

（なかなか・・・いいものだな）

そう思いながら歩を進める。

少し休もうと、観音寺はベンチに座った。

すると少し後ろのほうから女性の叫び声が聞こえる。

「きゃあ！ひったくり！誰かー！」

その言葉に反応した観音寺は

「むっ！私がユーの鞆を取り返してみせるぞ！」

そう言って走っていった。

その場に居合わせたですつと団は

「ひったくりだ！一護、いくぞ！」

「了解！」

そう言って走る。ウルキオラは

「あいつら、観音寺が見えんのか？」

と、せっかく観音寺をヒーローに仕立てるチャンスを見逃している二人を見守った。

「チッ！もう追いかけてきやがった！」

「なあ、なんか忘れてる気がするんだが・・・」

やっと気づいたかとウルキオラがため息を吐いた。

「お前ら、観音寺先生のこと忘れてるだろう」

「「あ」「

「どーするよ・・・」

「もういいだろう。これからもヒーローになりたいか、なりたくないかを決めるのは先生次第だ」

もうさすがに懲りただろう。

「むむっ！もしやですつと団もヒーローの座を狙って・・・！」

次はですつと団をライバルとしてみているようだ。

ヒーローになるにはどうしたらいいですか？（後書き）

観音寺の口調がわかんねえ・・・！

今回はおいしい所取りのですつと団でした（笑）

ぐだぐだと長くなりましたが、ここまで読んでいただきありがとうございます！

感想・誤字脱字などよろしく願います！

ルキアちゃんの奮闘（前書き）

テストのお話です。

ルキアちゃんの奮闘

P M 2 : 3 0 ですつと団部室

「そういえば、もうすぐテストだな」
きっかけはこの一言だった。

「ああ。ところでルキア、お前大丈夫なのか？」

「あ、ああ。大丈夫だぞ！」

肩が揺れ、きよどり始めるルキア。明らかに態度が変だ。
二人はすぐに察す。

(こいつ・・・嘘だな)

「なんだ！その疑いの目は！」

「ルキア、一回ノート見せてみる」

そう言うのと焦り始めた。

「い、いやだ！」

「何も書いてなくても怒らねえって」

「・・・本当だな？」

そう言つてゆつくりとノートを二人に見せる。

「・・・これは」

「予想はしていたが真つ白だな」

「うつ・・・だから見せたくなかったのだ！」

ルキアの目は半泣き状態だ。

しかし、これ以上のことをウルキオラが言う。

「・・・一つ提案がある」

「なんだ？」

「俺が小テストを作る。それを解いてみたらどうだ。」

「いいんじゃないか、それ」

「なっ！？いやだ！」

ルキアが必死で反対するのを見て一護が言う。

「ルキア」

「・・・なんだ」

「団長命令な」

「職権乱用だー！」

ルキアの叫び声は廊下に響いた。

数分後

「出来たぞ」

ウルキオラの作った小テストをグチグチ言いながら解いたルキアは疲れ果てていた。

採点結果

国語： 90点

数学： 40点

理科： 42点

英語： 25点

社会： 88点

「・・・これはまた」

「ある意味凄いな」

「う、うるさい！」

ルキアもう泣く寸前だ

「でも、国語と社会はかなり良いじゃないか」

「理数系は壊滅的だが」

ウルキオラが止めを刺す。

「・・・理科と数学は頑張れば何とかかなりそうなんだが、英語はどうしてもな・・・」

落ち込むルキアに一護が救いの手を伸ばす。

「しょーがねえな、英語は俺が教えてやるよ」

「なら、俺は数学と理科の勉強の仕方を教えよう」

ウルキオラはいつも学年主席、一護はトップ10には入っている。

「・・・いいのか？」

「元からそのつもりだったしな」

こうしてルキアのテスト勉強が始まった。

英語

「で、どこが分からないんだ？」

「全部」

「おいコラ」

即答で答えた。

「まあいいや、じゃあ簡単な問題作るから、わからなかったら呼べ」

「うむ」

数秒後

「一護、わからん」

「はええなオイ。で、どこだ？」

ルキアの指す問題を見ると

「have to と must の違いは何だ？」

「そこ中学の問題じゃねーか！」

have to と must は同じ意味だが、否定文にするとくしくしくしても良いとくくしてはならないになる」

「うーん・・・イマイチ」

「そうだな、例で言うと肯定文は

恋次は涅先生に逆らわなければならない、とする。

否定文では、涅先生に逆らわなくても良い、と涅先生に逆らってはいけない、になる」

「ほうほう！どっちにしる恋次の命運は尽きそうだが分かったぞ！」

恋次を犠牲にしつつも少しずつ理解しているようだ。

理科

「どうやって勉強したらいいのだ？」

「自分で分かりやすいようにノートにまとめたらどうだ？」

「おお、なるほど！」

「・・・よし、出来たぞ！」

「そのノートを毎日数回繰り返し読み読むといい。それだけで随分違うからな」

数学

この問題を問いてみる、といわれたルキアは黙々と解いていた。

「む？これはどうやるのだ？」

「この問題にはこの公式を使う。」

・・・よく出来ているな。次からは応用問題をするが良い。応用は配点が高いからな」

ウルキオラはアドバイスをしつつ、教えていた。

こうして一週間が過ぎ、テスト当日

（むっ！？なんだか凄い勢いで問題が分かるぞ！）

勢いが良すぎてルキアの席からはゴリゴリゴリっとならない音が鉛筆から出ていたそう。

テスト結果

国語… 95点
数学… 70点
理科… 75点
英語… 65点
社会… 80点

そして学年でトップ20に入ったそう。

「一護！ウルキオラ！」

「おー、見たぜ。頑張ったな」

「・・・おめでとう」

二人ともうれしそうに祝福してくれた。

「ああ！二人のおかげだ！」

「ばーか、最終的に頑張って努力したお前の結果だよ」

三人で少し話した後、

「・・・よし！テストも終わったし景気づけにカラオケ行か！」

「たまにはいいな。俺は賛成だ」

「行くぞ！」

そう言って三人は走っていった。

ルキアちゃんの奮闘（後書き）

・・・なんかウルキオラすっごいしゃべってるような・・・
ま、いつかー)

高校の問題は分かりません。

だって中学生だから（オイ

なんの教科があるかなんて知らないよ！

ウルキオラってどんな歌歌うんだろうか？

J-POP？いや、想像できないな。

演歌か？いや、それはそれで面白いけど（いいのか

ここまで読んでくださりありがとうございました！

感想、誤字脱字などありましたらお願いします！

大波乱の体育祭（前書き）

あわわわ・・・お久しぶりの更新です。
体育祭のお話です。

大波乱の体育祭

AM9:00 運動場

今日は体育祭でどのクラスも気合が十分入っている。

それは一護たちのクラス、2 3 も例外ではない。

「それにしてもあつついな・・・」

「そうだな。まさに体育祭日和だ」

一護とルキアが少し話していると、織姫がやって来た。

「黒崎くーん、朽木さーん！」

「おお、井上。どうした？」

「いよいよ体育祭だね。2人とも何の競技に出るの？」

「私はハードルだ。一護は確か、1000mだったな」

「ああ・・・それにしても井上楽しそうだな」

一護の言うとおり、織姫はいつも以上に笑顔だった。

「だって借り物競争があるでしょ？自由参加だから出ようと思って！」

去年まで借り物競争は他の競技と同じ人数制だったのだが、毎年大勢の参加希望者が出て後からブーイングが出るので自由参加にされたのだ。

ピーツと笛の音が聞こえた。

「100m走の選手の方は召集テントまで来てください」

召集係の者の声が聞こえる。

「あ！あたし100m走だった！じゃあね！」

「おー、がんばれよ」

「一護」

突然ウルキオラが声をかけた。

「ん？どうした？」

「部活対抗リレーはどうする。参加するか？」

「俺はどっちでもいいけど・・・ルキアは参加したそうだな」
キラキラした目で見上げてくる。

「したいぞ！」

「俺もしたい」

「じゃあするか。何もって走る？」

三人は考え込む。するとルキアが

「ですつと団の宣伝しながら走るか？」

「あー、それでいいんじゃない？」

「決まりだな」

何事もなく、午前の部は終了していった。

100mでは織姫と修兵が一位、1000mでは一護と恋次、走り幅跳びではギンと冬獅郎、ハードルではルキアとたつき、ハンドボールでは海燕とウルキオラ。

午後の部は借り物競争や綱引きなど、得点の付く競技はあまりない。

昼休みの間に部活対抗リレーが行われる。

基本は5人くらいでトラックを3周走る。

しかし、ですつと団は3人なので一人一周走らなければならない。

左から剣道部、柔道部、吹奏楽部、サッカー部、バスケットボール部、テニス部など並んでいる。

「よい・・・ドン！」

パンとピストルの音が響いた。

剣道部は竹刀を素振りしながら走ったり、吹奏楽部は吹きながら走っている中ですつと団は・・・

《猫探し、部活の助っ人、雑用なんでも受け付けます。ぜひご利用を！》

スピーカーを持ちながら軽やかに走っていた。

「うおおい！あれずるくね！？俺たちが必死に走ってる中で宣伝と

か！」

《うるさい恋次。もうたい焼きおごらねーぞ》
「すいませんでした！」

午後一番では借り物競争が行われる。

コースの真ん中に箱があり、その中に手を入れてお題を成し遂げる競技だ。

そのお題は恥ずかしいものもあれば簡単なものもある。

修兵の場合

「一番付き合いが長い異性」

（一番付き合いが長い異性ねえ・・・あいつか）
すぐに自分のクラスの所に走った。

「ちよつとこいつ借りていくぞ！」

そう言つて担いだのは蟹沢だった。

「うわぁ！え？なに？」

そのまま一直線にゴールに行った。

《女子生徒に人気の檜佐木選手！お題は何だったのでしょうか？》

「一番付き合いが長い異性。こいつ一応幼馴染だしな」

「なんだ、そうならそうと言つてよく。焦ったじゃない」

恋次の場合

「今一番輝いている人」

（輝いている人オ？うーん・・・後で怒られるかもな）

「一角さん！ちよつと来てください！」

「お？なんだ？」

そのままゴールへ行く。

《たい焼き命！な阿散井選手！お題は？》

「うるせーよ。お題は・・・ハイ」

そう言つてお題の書いた紙を渡すと逃げ出した。

《何だったのでしょうか？えーつと・・・

今一番輝いている人・・・》

そう言うのと全員が一角の頭を見た。

「・・・そうか。・・・阿散井イイイイ！！！！！」

一角は恋次を追いかけていった。

海燕の場合

「マイハニー」

（なんつーお題だよ。じゃあ行くか！）

「都！行くぞ！」

「え？なにかしら？」

そのまま横抱きをしてゴール。

《兄にしたい人ナンバーワンの黒崎（兄）選手！お題は？》

「マイハニーだってよ」

「もう・・・もう少し恥ずかしがりなさい・・・」

頬を少し染める都に横抱きしたままの海燕。

《まだまだ熱いですねー。外野からもしやし立てる声が聞こえます
ヒューヒュー、よそでやれ！、リア充が！など色々聞こえてくる。

最終種目はクラス対抗全員リレー。

今のトップは2　3の一護達のクラスと3・4の海燕のクラスだった。
た。

「このリレー勝てば俺たちは優勝だ。気拔くなよ！」

『『『下克上じゃあああああ！！！！』』』

そう言うて円陣を組んでいる。

「こわいわぁ・・・下克上ってこわいわぁ・・・」

ギンが何かを思い出したように震えていた。

抜かし抜かされていたが、アンカーから二番目になると全く一緒の所だ。

「弟でも今回は負けられねえな」

「言ってられるのも今のうちだ。俺が勝つ」

ついにアンカーの一護と海燕にバトンが渡った。

『海燕てめー、弟だからって手加減すんなよ!』

『今回はブラコン封印しやがれ!』

『都が待つてるぞー!』

など、声援が聞こえる。

『兄貴に負けんなー!』

『頑張れー! 黒崎ー!』

『根性見せろー!』

一護達のクラスも負けてはいない。

《おおーっと! 有名な黒崎兄弟の夢の対決だー! 兄の意地をみせるのか!? それとも弟の下克上がはじまるのか!?》

実況も熱くなっている。

残り数メートルをほとんど同時に走りきった。

《ゴール! さて、判定は・・・》

みんなが唾を飲み込む。

《勝者! 3 - 4 です!》

ワアアアと歓声が上がった。

感極まって、涙を流している生徒もいる。

「わりい。負けちまったよ」

「しょうがないさ、校内一速いって噂の人だしね」

「あれに追いつく一護もすごいよ」

「でも総合で二位だぜ? すげーよ!」

一護も暖かな雰囲気包まれていた。

P M 8 : 0 0 黒崎家

井上の提案があつて黒崎家で打ち上げをしていた。

体育祭が終わったあとすぐに打ち上げをし、ドンチャン騒ぎをして

疲れたのか眠る者も出始めた。

一護が全員に掛け布団をかけていると、海燕が二階から降りてきた。

「よう、大分静かになったな」

「わりいな、疲れてんのにうるさくして」

「いいさ、楽しかったんだろ」

兄弟でたわいない話をしていると一護がうつと、と目をこすり始めた。

「こいつらのこと見てやるからお前もちょっと横になれ」

「んー。そうするわ」

すぐに寝息を立て始めた一護に微笑みながら

「おやすみ」

そう言った。

大波乱の体育祭（後書き）

一回題名を入れ忘れてデータ全部消えたんだぜ・・・？信じられるか？

どうしても海燕さんを入れたかったんです。

都さんとは親公認のカップルだったらしい。

設定のほうを色々書き直したので詳しくはそちらを。

それにしても今回ルキアとウルキオラ全然しゃべってねえ・・・。

では、誤字脱字の報告、感想などお待ちしております！

大混乱の文化祭（1）（前書き）

文化祭のお話です。

恋次が相変わらず不憫です（笑）

長くなると思いますのでいくつかに分けて更新します。

大混乱の文化祭（１）

AM8:00 教室にて

「もうすぐ文化祭だな」

「ああ。うちのクラスは喫茶店だからな！」

「へえ、そうなのか？」

「貴様・・・寝ておったのか？」

そのときの一護は爆睡中だったようだ。

「思ったより普通だな。うちのクラスのことだからもつと変なのか
と思ってた」

自分のクラスをどのように認識しているのだろうか。

「変な提案もあったが委員長がばっさり切り捨てたのだ」

「ああ、石田ね・・・」

「メイド喫茶とか年上の女性のくどき方講義があったぞ」

「なんか誰が提案したのか予想つくわ」

おそらく本庄千鶴と小島水色だろう。ちなみに年上の女性の口説き
方講義は男子に高い支持があったようだが不健全ということで除外
された。

廊下のほうからすごい勢いで走る音が聞こえた。

その音はこちらに近づいてきて、教室のドアを開く。

「わりい！ちよつと匿ってくれ！」

入ってきたのは恋次だった。

「え？どうしたんだよ？」

一護が恋次に理由を聞こうとすると、もう一度ドアが開いた。

「ゴルラァ恋次イ！出てきやがれ！」

「檜佐木さん、どうしたんすか？」

入ってきたのは顔と頭と運動神経が抜群で思考がちよつと残念な修
兵。

「おー一護、恋次見てないか？」

「ここにいますよ」

「あ！一護てめえ！」

「よお恋次、いい加減諦めて入れや」

「いやっすよ！」

二人は言い争いを始めてしまった。3人は置いてけぼり状態だ。

「あの、話が見えないんすけど・・・」

「ああ、実はな文化祭でバンドをしようと思ってさ、俺3年じゃん？最後の文化祭の思い出作りに残ることしたくて・・・それで恋次を熱心に誘ってたんだよ。こいつドラムできるから」

「本当の理由は？」

「女子にキヤーキヤー言われたい」

なんとも本能に忠実な意見だ。

「熱心に誘うって言うよりあれ脅迫だろ！廊下でいきなり胸倉掴まれて『バンド入れや・・・』って！」

恋次も苦勞をしているようだ。

「へー・・・大変だな」

「・・・ですつと団はなんでも引き受けてくれるんだよね？」

怪しく光った修兵を見て、3人は嫌な予感がした。

「バンドメンバーになれ！」

（やつぱり・・・）

予想は当たったようだ。

「どうしてもって言うんなら引き受けますけど、俺楽器弾けませんよ」

「私はギターを少しなら弾けますが・・・」

「俺はピアノなら弾けるぞ」

ルキアのギターが弾けるというのは修兵にとって以外だったようで目を少し見開いた。

「よし、じゃあ一護はボーカルな。朽木は俺とギターで、ウルキオラはベースな」

次々と決まっていくなかに一護は頭を抱えなくなった。

「まあいいではないか！楽しそうだ！」

「努力はする」

ウルキオラとルキアは結構乗り気だ。

「てか、俺がボーカルでいいのか？」

「何を言っている！貴様しか適任はおらんだろう！」

「いつも90点代を次々に出しているだろう」

「どうやら一護は歌がかなりうまいようだ。

「そりゃ楽しみだな！……つーことだ、諦める恋次」

修兵はニヤリと笑いながら恋次にそういった。

「分かりましたよ……やればいいんですよ」

ついに恋次はバンドに入ることになった。

PM7:30 黒崎家

「ただいまー」

一護がガチャリと家の扉を開けると

「遅いわこの馬鹿息子がー！」

一護の父、一心がとび蹴りを仕掛けてきた。

「なんでだよ！ちゃんと門限守って帰ってきただろうが！」

「余裕をもって帰って来い！」

恒例の親子喧嘩をしていると、妹たちが話しかけてきた。

「一兄、ヒゲにかまってないでご飯食べたら？冷めるよ？」

「あ、おかえりー。もう！お父さん暴れないの！」

「だ、だつて！」

娘に怒られる父を傍から見て、父としてどうなのだろうか、と一護が考えていると海燕が来た。

「親父、一護だつて友達との付き合いもあるんだからさ、多目にみてやれよ」

そついいながら一護の頭をわしわしとなでる。

海燕に怒られていじける一心。

海燕は思い出したように一護に聞いた。

「そつえば一護、修兵達とバンド組むんだって？」

「げっ・・・もう広まってるのかよ」

「本人から聞いた。修兵が『お前の弟、口説き落としたぜ』って言いやがったから、何をしたって問い詰めた（脅した）らバンドに誘った言ってた。で、何もされてないか？」

「くど・・・何もされてねーよ。心配性だな」

修兵に少し同情しながら呆れていた。

海燕は自他共に認めるシスコンでブラコンだ。あまりに心配しすぎてたまにうざがられる程に。

「え！お兄ちゃんバンドするの！？文化祭、絶対見に行くからね！ね、夏梨ちゃん！」

「え？う、うん。まあ頑張れば？」

大興奮の遊子に冷静な夏梨。双子でも反応は此処まで違うようだ。

「もー夏梨ちゃんてば素っ気ない！本当は嬉しいくせに」

「なっ！？違うよ！」

どうやらただ恥ずかしかっただけのようだ。

兄妹だけで話していると一心がぼそりと言った。

「うっ・・・子どもたちが話に入れてくれない・・・。母さん早く帰ってきて・・・」

同時刻 朽木家

「姉様、兄様！文化祭でバンドに誘われたのですが、家にあるギターを使ってもよろしいでしょうか？」

「あら、バンド？珍しいわね、ルキアがするなんて」

ルキアの姉、緋真が言った。

緋真はルキアと顔が瓜二つだ。性格はとても大人しく優しい女性である。

「ですつと団に依頼があつて引き受けたのです」

「たのしそうですね。白哉様、どうでしょう？」

緋真が聞いたのは数学教師の白哉である。緋真とは結婚してルキアの義兄だ。

ルキアとは美的センスが似ていて自作キャラクター『ワカメ大使』はルキア絶賛らしい。

「良いも何も自分で決めることだ。好きに使え」

「ありがとうございます！」

「バンドはだれとするの？」

「一護とウルキオラと恋次と檜佐木先輩です」

「男の子ばかりねえ。大丈夫？」

わつぱりルキアも年頃の女性なので緋真も心配なようだ。

「黒崎と阿散井がいるから大丈夫だろう・・・やるからには必ず成功させる」

「はい！」

力強く頷いた。

同時刻 シファア家

「グリムジョー、飯ができたぞ」

「おう」

ウルキオラとグリムジョーは一つ違いの兄弟だ。

グリムジョーは高1でウルキオラとは性格も容姿も似ていないが、好きなもの（トマト）だけは一緒。

この兄弟はトマトを愛してやまないのだ。

「そういえば、ですつと団でバンドするんだって？」

「ああ、檜佐木に誘われてな」

「珍しいじゃねえか。何の楽器するんだ？」

「ベースだ」

「へえ・・・ピアノも習って役に立つこともあるんだな」

「俺も意外だった。・・・テスラとノイトラに餌をやらねば」

「おお、そうだった。テスラー！ノイトラー！」

「わん！」「にゃー」

グリムジョーが呼んだのは犬のテスラと猫のノイトラだ。

二匹はウルキオラに拾われ、この家に住んでいる。

餌をもささと食べる二匹を見て二人は和んでいる。

どの家も今日も平和なようだ。

大混乱の文化祭（１）（後書き）

一護が歌うまいっていうのは私の希望です（笑）

海燕さん、またまた登場です。思いつきり私の分身です。

私も海燕さんにわしゃわしゃされたい！

緋真さんの口調が迷子。わからん・・・！

基本みんな仲良しですのでウルキオラとグリムジョーは喧嘩しません。

二人がもしかもしゃトマト食べてるの絶対かわいい。写真撮りたい

（

テスラ飼いたい。絶対になついたらかわいい。

ではここまで読んでくださってありがとうございます！

誤字脱字の報告、感想などお待ちしております！

大混乱の文化祭(2) (前書き)

おおおお遅れてすみません！
今回はバンドで個人の練習編です。

大混乱の文化祭(2)

翌日から練習が始まった。

曲名は「superlativo il」ゆったりとしたバラード曲だ。

作詞作曲は修兵がしたようだ。

その曲を一護達が聴き終わると、

「・・・へえ、結構いい曲だな」

「ゆったりしてて聞きやすい」

好評のようだ。

「イタリア語、英語、フランス語、ドイツ語で愛に関係するものを詰め込んでみた」

「先輩らしいすね」

感心しながら聞いていると、一護は何かに気づいたようにハッとした。

「ちよつとまで！歌うの俺じゃねえか！恥ずかしすぎるわ！」

一護が焦り始めるとルキアが呆れたように言った。

「いまさら何を恥ずかしがっておる。もっと恥ずかしいこともしていただろう。中学生のときにクラスの女子に頼み込まれて女装とか・

・」

「あああああ！！あのことを掘り返すんじゃない！あれトラウマだから！」

「何があつたんだよお前・・・」

中学生のときから苦労性だったようだ。

「じゃあ、これ楽譜な。練習して来いよー」

そうしてその場は解散となった。

PM8:00 黒崎家

「pour les beaux yeux de tendre

sses lovableゝるあっ・・・また噛んだ・・・もー何なんだよこれ！舌回らねーよ！」

一護が愚痴を言いながら練習していると海燕がやってきた。

「おーがんばってんなあ。調子はどうだ？」

そっついながら一護に温かいココアを渡す。

「あ、サンキュ。イタリア語だか英語だか知らねーけど訳分からねーよ」

「はは！大変だな」

苦笑いしながらも受け答える。すると、

「あ、あと聞こうと思ってたんだけどよ、お前とルキアって付き合ってたのか？」

ブフォツと勢い良くココアを噴き出した。

「・・・はあ！？」

「いや、な？今学校でこの写真が流れてんのよ」

そう言いながら海燕が見せたのは一護がルキアを抱き上げてる写真だった。

「なんだこれ」

「友達から回ってきた」

「ん？こつて学校の裏庭じゃねーか。そっいえばこの前、用務員のハリベルさんに頼まれて掃除してたっけ・・・」

「で、どうやってたらこうなったんだ」

海燕も不思議そうだ。

しかし確かに、掃除してただけではこんなことにはならないはずだ。

「上のほうにゴミがあつてさ、その高さじゃ俺でギリギリ届かなかったからルキアを担いで取ってもらったんだ。そのときなんでウルキオラがケータイ構えてんのか気になってたけどそれか・・・」

「お前も苦労してんだな」

海燕は少し一護に同情してしまう。

「まあ、練習がんばれよ。兄ちゃんが本番しっかり撮っててやるからなー」

そついいながら部屋を出て行つた。

「やめろ！次の日から学校行けねえじゃねえか！……たく、あの兄貴は……。練習しよ。」

再び一護は歌の練習をし始めた。

同時刻 朽木家

「えつと次がこのコードで……。ここからはこうか？」

ルキアは楽譜と格闘していた。

「失礼する」

入ってきたのは白哉だった。

「随分熱心だな。少し気になった事があるのだが良いか？」

「？はい、何でしょう？」

白哉は真剣な顔をしてこう尋ねた。

「黒崎一護と付き合っているというのは本当か？」

ガッチャーンと譜面台を倒した。

「す、すいません……。それはどこで？」

「今日携帯で騒いでいた者を注意したとき写真をみせられ、聞かれたのだ。これは本当かと。」

白哉に見せられた写真は海燕に送られてきたのと一緒にだった。

「おそらくその写真を流したのはウルキオラです。全くあやつは……」

「。その噂は嘘ですから気にせずをお願いします」

「そうか。では失礼する」

パタンと扉が閉められた。

「えーとそれから……」

再び楽譜と格闘し始めたのだった。

同時刻 シファア家

ウルキオラの部屋からは美しい音色が聞こえてくる。

「……こんな感じが」

パチパチと拍手が聞こえてきた。

「グリムジョーか」

「すげえじゃねえか。もう覚えたのか？」

「大体はな」

「そういえば、学校で今噂になってる黒崎と朽木の写真を流したのお前だろ」

「そっぴいながら写真を見せる。」

「ああ。今回もいい具合に広まってるな」

「今までにも何回かはあったようだ。」

「あの二人はからかい甲斐があるからな」

「ウルキオラが少し笑みを浮かべて言う」とグリムジョーが驚いたように言った。

「・・・お前あいつらと一緒に居るようになってから変わったな。いい意味で」

「そうか？まあ、あいつらと居るのは面白いからな」

「ふーん。ま、頑張れよ。ここにトマト置いておくからな」

「そう言っでトマトが三つ乗った皿を置くと部屋を出ていった。」

「・・・やっぱりトマトはうまいな」

「トマトをしゃくりと食べながらそう呟いた。」

大混乱の文化祭(2) (後書き)

歌詞については触れてやらないでください。

イタリア語と英語、フランス語、ドイツ語を適当に並べただけですので(汗)

曲名の「superlativo il」とは最上級の愛とかそんな感じだった気がします(アバウト)

一護はお母さん似だから女装が似合うと思うんだ。ね?(誰に聞いている)

ウルキオラの過去は書こうかなーと迷ってます。

ではここまで読んでくださってありがとうございます!

誤字脱字の報告、感想などお待ちしております!

大混乱の文化祭（3）（前書き）

遅れてすみませんでした！
今回で文化祭終了です。

大混乱の文化祭（3）

数日後の放課後、ですつと団部室にて

………

「・・・ふう」

曲の合わせが終わり、一護が一息をついた。

「おー、結構出来てるじゃねえか。この調子で本番も頑張ろうぜ！」

『おお！』

全員、張り切っているようだ。

そうして、毎日放課後は全員で部室で練習、家に帰ったら個人で練習をしていた。

始めは渋っていた一護もやるからには真剣に、という性格なので毎日練習をしている。

そういう日が毎日続き、そしてついに、本番がやってきた。

文化祭本番 ステージ舞台袖

（・・・ん？）

一護は朝起きたときから、のどの調子がおかしかった。

いつもより声が出にくく、変だったのだ。

そのうち直るだろう、と放っておいたのだが今になって少し悪化してきたのだ。

「どうした一護？」

ルキアが心配そうに顔を覗くと

「いや、なんでもねえ。ほら、行こうぜ」

「あ、ああ」

ステージ

「こんにちはー！皆のアイドル、檜佐木修兵です！」
「キヤー！」と観客のほうから歓声があがる。

「先輩、皆のアイドルとか寒いっす」

「では、メンバー紹介から！じゃあ、一護！」

「無視か！さらつと無視か！」

修兵は恋次の突込みを華麗にスルーし、メンバー紹介に入った。

「ボーカルの黒崎一護です」

「一護はチヨコレートが大好きだから、あげたら懐くぞ！」

「俺は犬か」

少し茶々を入れながらメンバーの紹介をしていく。

メンバー紹介が終わると修兵が

「グループ名は『palette』です。よろしくー！」

残りの四人はポカーンと口を開けていた。

「初耳なんですけど」

「そりゃそうだ。今考えたし」

「おいコラ」

四人からはブーイングが来るが修兵はお構いなしに進める。

「うるせーな。んじゃま、歌うぞー・・・『superlati
vo il』」

今までのぐだぐだが嘘かのように、始まると全員の目つきが真剣になった。

adorabile amore eterno affezio
nare caro
affetto amour passionnel cordi
allement

amants bien-aim affectionner
orloter mignoter
idylle joliment aimer minois
sentimental.....

一護の声は暖かい中にもしつかりとした声があり、それに寄り添うように弾かれるルキアと修兵のギターに、包みこむようなウルキオラのベース、すべてをしつかり支えるドラム、と全てバランスよくとられていた。

観客もそれにうつとりし、顔を赤らめている者までいた。

(これなら最後までいけそうだな・・・)

と、一護が少し安心しサビに入ろうと息を吸い声を出そうとすると、

(・・・え？声が・・・でねえ)

一護が少し焦ると、修兵が小声で話しかけてきた。

「どうした？」

観客もおかしいと思ったようで少しざわつき始める。

(どうしたらいい？俺のせいで・・・)

一護が焦るとルキアがこっそり耳打ちをした。

「大丈夫だ。任せろ」

どういうことか聞こうとすると、恋次のドラムの音が聞こえ、ルキアとウルキオラが歌い始めた。

少し声が出るようになった一護も慌てて歌い始めた。

affectueusement affectueux ten
drement
avectendresse pour les beaux
eux de tendresses

lovable auspicious darling to
starve for love
fruit of love's sake pass
ion
sweetheart attachment longing f
or other
tender passion volage amoureux
tomder amoureux
passade sahn suehtiger

曲を終え修兵が話し始めた。

「いやーわりいわりい。サビに行くところ間取り過ぎたわ。『あれ、
どうやって入ろう?』って思っちゃまってさー」

「先輩ー、すっかりしてくださいよー」

「うるせえ! 恋次のくせに!」

「なにその恋次差別!」

会場もクスクスと笑い暖かい空気に包まれた。

舞台裏

「一護、喉大丈夫か?」

「んー、さっきよりはマシ」

ルキアと話していると、修兵が一護の顔を見てため息をつき、

バチンツ!とデコピンをした。

あまりの痛さに一護は身悶えうずくまっていた。

「ったく・・・なんで早く調子悪いつて言わない」

「・・・え?」

怒られると思っていた一護はきょとんとしている。

「どうせステージ台無しにした、とか思ってたんだろうけどそんなわ

けねえだろ。

喉がかれるほど頑張ってくれたんだろ？ありがとな」
頭をわしゃわしゃと撫でながら言った。

「お前らもありがとな。おかげで最高の思い出になったよ」
笑顔で全員に感謝を告げた。

大混乱の文化祭（3）（後書き）

ふおおおおお・・・やっとできた・・・
お待たせしてすみませんでした！

英文の歌詞のほうは突っ込まないでください。
いろいろ間違ってますが触れないで！

満面の笑みの修兵パワーはすごいと思うのです。
一撃でノックアウトですね。

これからの話は本日書いた活動報告にて詳しく書いています。

では、ここまで読んでくださりありがとうございました！
誤字脱字、感想などお待ちしております！

年上のあの人が気になるんですがどうしたらいいですか？（前書き）

有言実行できなくてすいません！

今回は保育体験の話です。

アニメのオリジナルキャラが出てきます。

年上のあの人が気になるんですがどうしたらいいですか？

「みんな〜！今日はお兄ちゃんとお姉ちゃん達が遊びに来てくれました！仲良く遊びましょうね！」

『はい！』

今日は近くの保育園で保育実習が行われていた。

「元気だなー・・・」

「うむ！私も負けてもらえんな！」

「何張り合ってたんだ」

子どもside

私は九条望実。4歳だ。今日はお兄さんたちが来たらしい。

私にはあまり友達がいない。いつも一人だ。

みんなをボーッと眺めていると

「よっ！」

オレンジ色の髪の毛をしたお兄さんが話しかけてきた。

「・・・だれ？」

「俺は一護。お前の名前は？」

「・・・九条望実」

「望実か。望実はみんなとあそぶねえのか？」

「かんけーない」

なんなんだ、こいつは。いきなり話しかけてきて

すると、そいつは私の髪の毛に触ってきた。

「なにをする」

「いや、綺麗だな、と思って」

「・・・え？」

「髪の毛の色、綺麗な緑だな」

初めてだった。みんなから変な色だ、と言われていたこの毛を褒められたのは。うれしい。

「お前の髪の毛もキレイなオレンジ色だ」
少し恥ずかしかったけど素直に言った。

「本当か？ありがとな」

そう、笑顔で頭をなでられた。

顔がだんだん熱くなって、なんだかポワポワする。

「一護！」

知らないお姉さんが名前を呼んだ。

「おお、ルキアか。どうした？」

「向こうでその子と遊びたいと子どもたちが言っていてな。誘いに来たのだ」

話している言葉は良く聞こえないけど、見ていてモヤモヤする。

「望実、向こうに行かないか？」

「でも・・・」

向こうに行ったら一護と離れてしまう。

「俺も行くから。な？」

「わかった」

そう言つて一護の後ろを付いていく。

「お前も案外隅に置けんな」

「は？」

小さい声でなかなか話が聞こえない。

「ルキアお姉ちゃん！呼んできてくれた？」

「ああ、連れてきたぞ！」

「やったー！僕たち、のぞみちゃんと遊んでみたかったんだ！」

「・・・私と？」

びっくりした。だって今まで話したことなかったのに。

「なにするー？」

「んー、じゃあねえ・・・かくれんぼしようよ!」

「さんせー!のぞみちゃんもいい?」

「う、うん」

いきなり話しかけられて焦った。

「よし、鬼は私たちがしよう。10分までに見つけられなかったら鬼が負けでいいな?」

『はい!』

「じゃあ10秒数えたら行くからな!・・・よいドン!」

2人が目をつぶったら一斉に逃げ出した。

私たちは木の上や机の下に隠れる。

私は水道台の下のくぼみに隠れた。

ここは見つかりそうでなかなか見つからない。

「10!・・・よし、行くぞー」

「私はこつちを探す。貴様はあつちだ」

「へいへい」

数分後

「真子はっけーん」

「なんでわかんねん。ここマンホールの中やで」

真子は関西弁が特徴の男の子だ。

マンホールの中からひよっこり顔を出している。

「俺も昔マンホールの中に隠れて落ちそうになったからな」

(実話です)

「アホやろ・・・ってギャー!」

「うお!言ってるそばから落ちそうになってるじゃねーか!」
無事救出されたようだ。

「リサちゃん見つけたぞ!」

「みつかってもーた」

こちらは三つ編みでメガネをかけている関西弁の子だ。

「というよりココ、暖炉の中だぞ。危ないだろう?」

「この前六車先生の机にエロ本を置いて怒って追いかけられたとき見つけたんや」

少し自慢げに話すりサ。

「なんというか・・・そういう物はまだ早い」

もう少し時間が経つとほとんどの子が見つかって残るは望実だけだった。

「どこにいるんだ?」

2人とも望実の前を何回も通ったが全然気づいていない。

「どこに隠れたんだろうね?」

子どもたちも不思議そうだ。

「お2人さん、あと10秒やで」

「本当だ!」

真子の言葉を聞いてカウントダウンをし始めた子どもたち。

「3・2・1・・・ゼロ!!」

「のぞみちゃん出てきてー!」

大声で言うつと二人が立っていた後ろの水道の下からひょっこりと顔を出した。

「あー・・・そこか」

「すげー!のぞみちゃんつよい!」

何が強いのか分からないが子どもたちは望実を取り囲んでいる。

望実は少し照れた様子で話していた。

始めは馴染めなかった望実だが一護たちが来たのがきっかけでみんなと溶け込んでいった。

夕方

「お兄さんとお姉さん達にありがとうの挨拶をしましょう」

「ええー！？もう帰っちゃうの？」

子ども達からブーイングの嵐だ。泣き出している子もいる。

「みんな、わがまま言わないの。はい、ありがとうございます。は？」

『ありがとうございます』

校門前まで子ども達は送ってくれた。

「ばいばーい！」「また来てねー！」

そう言っで見送る子ども達の中で望実がこちらに走ってきた。

一護の側までくると足にしがみ付いて、ルキアに言った。

「負けないぞ！」

きよとん、としたルキアはすぐに察してクス、と笑った。

「フフ、楽しみにしているぞ」

そのやり取りの意味が分からない一護は頭に？を浮かべている。

そんな小さな九条望実の初恋

おまけ

「そういえばウルキオラと遊ばなかったな」

帰り道、いつもの3人で話していると一護が言った。

「ずっと女の子にままごとをしろ、とせがまれていたからな」

「珍しいな。父役か？」

「いや、執事役だ」

「「・・・は？」」

年上のあの人が気になるんですがどうしたらいいですか？（後書き）

THE・一時間クオリティ（

今回は護廷十三隊侵軍篇のオリジナルキャラクター、望実ちゃんが
出てきました！

望実ちゃん好きなんですよー。可愛いですよ。

拳西と羅武は幼児に変改できませんでしたので先生です（笑）

おまけのウルキオラの話は妄想です（笑）

執事っぽくないですか？え？違う？そうか・・・

では、ここまで読んでいただきありがとうございました！
誤字脱字の報告、感想などお気軽にどうぞ！

焼き芋をするときは注意しましょう（前書き）

1ヶ月近くほったらかしですみません！

今回は焼き芋の話です。

焼き芋をするときは注意しましょう

『焼き芋するから公園来いよ』

悪夢はこの一本の電話から始まった。

「おい、来たぞー！」

「おう、こつちだ」

ルキアが叫ぶと一護が返事をした。

「一護！焼き芋は何処だ！」

「アホ、これからするんだよ」

何かに疑問を持ったウルキオラが聞いた。

「何故公園でするんだ？家でも出来るだろう」

「うちのバカ親父が騒ぎだしてな、公園でする事になった」

バタバタと足音が近づいて来た。

「よ！朽木にウルキオラ！来たんだな」

「「こんにちは」」

海燕も友人の修兵を呼んだらしく一緒にやってきていた。

「よ！元気か？」

「お久しぶりです、先輩」

「バンドのやつ見たぜ？凄かったなー」

文化祭の次の日に海燕が撮ったビデオを黒崎家で見たとんだ。

ちなみに内容は、全体で撮られたものと、一護オンリーで映っているものの比が2：3だったそう。

海燕の意見『一護を撮らなきゃ誰を撮る』

「皆の衆！こつちで『ドキッ！黒崎家＋ の焼き芋大会』をするぞ
！」

「またアレすんのかよ……」

く『ドキッ！黒崎家＋ の焼き芋大会』とは
まだ焼いていない芋を半分に切り、少しくりぬいた所に指令が書か
れた紙をいれ、新聞紙で包んでから焼く。

当たった指令には必ず従うこと。

(W i k i p e d i a には書いておりません)

「ようし！始めるぞ！」

『おー！』

何だかんだ言って、全員やる気十分だ。

30分後

「……げ、当たっちゃった」

「ざまあみろ！日頃の行いが悪いからだ！」

「女装しているために言われたかねえよ。視界の暴力だ。消え失
せろ」

一護の前で威張っているのはセーラー服姿の一心だった。
筋肉質な体とゴツイ顔には色々無理がある。

「お兄ちゃん達のどっちかに着てほしかったのに……」

ぼそつと遊子が呟くと、一護と海燕の背筋が凍った。

「ところで一護の指令はなんだ？」

「えーつと……」恋次に電話をして罵詈雑言を吐く」

「お！私のだな！」

指令を出したのはルキアだった。まあ、ルキアらしいと言えばルキアらしいが、相変わらず恋次が不憫だ。

「お前、目が輝いているぞ。」

……たく、友にこんなことしなければならないとは……」

「一護、お前も顔が緩んでいるぞ」

心無しか、眉間のしわが緩んでいた。

“ プルルルル……ピッ ”

『 よ、一護。どうした？ 』

「恋次、悪く思っなよ」

『 は？ 』

「バーカ、単細胞、変眉、赤パイーン！」

『 ……はあ！？ちよつと待てゴルア！喧嘩売ってん 』

“ ピッ ”

「これでいいのか？」

「ああ、バツチリだ！」

満足そうな2人の様子を見た夏梨はウルキオラに聞いた。

「ねえウルキオラ君、あの2人っていつもこうなの？」

「ああ」

「ふーん……」

物珍しそうな顔で夏梨は2人を見ていた。

「もしかもしや……」

「む、俺か」

声を出したのはウルキオラだった。

「指令はなんだって？」

「『モノマネをしろ』……か」

「あ、あたしのだ、それ」

ウルキオラは夏梨のを引いたみたいだ。

「……アレをする」

「まさか……アレか？」

「本当にアレをするのか？」

「ねー、アレってなに？」

3人が言っている“アレ”が気になったのか遊子が聞いた。

「見ていれば分かるさ。アレの威力は絶大だ」

「夏梨、先輩、覚悟しておいたほうがいいですよ」

「「え!?!」」

まさかここで話を振られるとは思わなかった2人は驚いた。

「……………いくぞ」

一護とルキアは唾を飲み込んだ。

「パースター!!」

パースター…スター…ター…

エコーしながら町中に響いた。
すると……

「お兄様?どうかなさいましたか?」

「え!?!夏梨ちゃん!?!」

「あつ、え!?!なに今の!?!」

「マズいねえ、君の飯」

「おい修兵!?!」

「ん!?!なんだこれ!?!」

ちよつとした混乱に陥っている4人。

「てか、久しぶりの台詞がこれってどうなの!?!」

そんな言葉を見殺しして一護は説明をしていく。

「前に学校でウルキオラがこのモノマネをしたとき、クラスにいる

啓吾と石田、廊下を歩いていた冬獅郎が、さっきみたいな反応してな……」

3人は遠い目をしながら話した。
余程大変だったようだ。

混乱が治まり、全員が食べ終わった頃

「ふう…結構旨かったな」

他愛ない世間話をしていると…

「ゴルア！今年もまた黒崎家がアアアアア！」

ほづきを持ったホリの深い男性が怒鳴りながらこっちに走ってきている。

「げっ！町長だ！」

一心がマズい、という顔をした。

「親父！今年も話してなかったのかよ！」

「いや…あの……てへ」

「てへ じゃねエエエエ」

どうやら許可を取らずにしていたようだ。

「とりあえず水をかけてにげるぞ！」『サー！イエッサー！』

海燕の掛け声とともに俊敏な動きであらかじめ用意しておいた水を

火に掛け、直ぐ様逃走した。

そして捕まえ損ねた町長は……

「くそくそ！今年も逃げられた！いつか捕まえてやるぞ、黒崎家め
えええええ！！」

焼き芋をするときは注意しましょう（後書き）

某国擬人化漫画ネタ多くてすみません。

なかの人ネタが好きなんです！

あと、海燕と修兵が空気ですみませんでした！

誤字脱字、感想などお待ちしております！

バイトを手伝え（前書き）

更新遅くなってすみません！
今回はクリスマスのお話です。

バイトを手伝え

今日はクリスマス。街中にはクリスマスソングが響き、装飾でキラキラと輝いている。

そんな中でもずっと団は通常運転でお送りします。

「ちょっとツラかせや」

「「「……え」」」

ただいま、自分の顔にそっくりな人に絡まれています。

「ですつと団に命令がある」

「命令なんだ。頼みじゃなくて命令なんだ」

「クリスマスにバイトがあるから手伝え」

「ちなみに否定という選択肢は？」

「そんなもんあると思うのか？」

『イイエ、オモイマセン』

ですつと団に命令しているこの男性は極悪非道、ドSの鏡といわれている白崎。

一護と顔がそっくりで、一護の顔の色彩をなくしたようである。

「場所は三番街のブラッディガーデンという店だ」

「店名物騒すぎるだろ」

「その店なら聞いたことあるぞ。」

店名は物騒だが店の中はいたって普通。ケーキやクッキーはかなりおいしいが、10個のケーキの中に一つだけケーキのスポンジがリアルスポンジになっているらしい」

「ええー……いろんな意味でブラッディじゃねえか……」

ウルキオラが簡単に説明すると一護は渋い顔で突っ込んだ。

「まあそついうわけだから今日の夕方、五時からしつかり来いよ。もし来なかったら……わかってるよな？」

『モチロンドス』

ですつと団は素直に応じた。

P M 5 : 0 0 ブラッディガーデンにて

「白崎さーん、来たぜー」

三人が店に入っていけば、お客さんが3、4人来ていた

「おう、来たか。まあこっち来い」

白崎に連れられて店の奥に入ると、店長と名乗る人が出てきた。

「こやつらが白崎が連れてきた者たちか？」

彼の名は斬月。サングラスをしていてかなり長身の男だ。

「はい。今日はよろしく願いします」

「いや、こちらこそ急なことで済まぬな。どうせうちの息子のことだ。きちんとお願ひもしてないのだろう」

「……息子？」

三人に衝撃が走った。

「ああ。聞いていなかったか？ここはあいつのバイト先であり、あいつの家だ」

（（に……似てない））

三人は同時に、なぜこの人から白崎が生まれたんだろうと思った。

「さっそくだが、お前たちにはこれを着てもらっ」

そう言って渡されたのはサンタのコスプレ衣装。
ルキアのはスカートタイプだった。

「……これは？」

「サンタの衣装だ」

「そんなのみりゃわかるよ。なんでこれ着んの？」

「これを着て店の前でケーキを売ってもらっから」

「まじかよ……」

渋る一護と不服そうなウルキオラ。ルキアだけが楽しそうだ。

「良いではないか！面白そうだ！」

「お前だけな」

「黒崎イ、そんなにこの服が嫌だったら長い髪のウィッグ被って女子バレージョン着るか？」

「ありがたく男性物を着させていただきます」

ニヤニヤとしながら言う白崎に一護は即答した。

「一護、顔色悪いが大丈夫か？」

「だ、大丈夫だ。少し昔のことを思い出しただけだから……」

ペカー（トラウマが開く音）と一護の頭の中で鳴っている。（文
化祭編参照）

「では、これらを頼む」

三人は着替えるとすぐにケーキを渡され店前で売った。

「こちらブラッディガーデン！店名はアレだけど、味は絶品！ぜひ
お買い求めをー！」

順調に売りさばいて行く三人。

しかし一定の量を超えるとケーキは売れなくなってくる。

「白崎さん、限界がきたぜー?」

「まだまだいけるだろ。もうちょいやれや」

「いや、もう無理ですって」

「チツ……しゃーねーな、秘密兵器を出すか。」

「……おい!天鎖ー!!」

白崎がそう呼ぶと、奥から眉間にしわを寄せた子供が出てきた。

「なんだ白崎。うるさいぞ」

白崎が秘密兵器として呼んだのは、小さな子どもだった。
子どもの名は天鎖斬月というらしい。

「こいつは俺の弟でな。この店の販売員だ」

白崎が説明をしていると天鎖斬月と一護は顔を見合わせて大きく目を開いた。

「……ん?お前、もしかして……」

「……貴様はあのときの……!」

「どうした、知り合いか?」

「この前言っていた恩人だ。……あときはすまなかった。助かった」

「いや、俺は当たり前のことをしただけだし……」

二人は面識があったようだ。

「とりあえず天鎖を連れて行け。バカ売れするから」

「まったく貴様は……毎年この時期になるとこうか……」

「?????」

一護は二人の会話についていけない。

「一護遅いぞ！……その子どもは？」

「白崎さんの弟なんだってよ。そんで秘密兵器らしい」

「？ 意味がわからんぞ」

「俺もよくしらねえ……」

三人が首をかしげていると、天鎖斬月は近くにあったマイクを手にとった。

「これ、借りるぞ」

「おう、なにするんだ？」

「いいから見てろ。それと貴様らは適当にポーズをとっておけ」

「は？」

スウ……

天鎖斬月は大きく息を吸うと、

《こちらブラッディガーデン！舌がとろけるほどおいしいケーキが売ってるぞ！

今なら三タイプのサンタクロースが手渡ししています！》

天鎖斬月はテレビショッピングのジャパネットたた並に宣伝し始め、一護にマイクを向けた。

《いまや王道のツンデレサントー！》

「……うええ！？俺！？」

「いいからそれっぽいことを言え」

「お、お前のために作ったんじゃないんだからな！た、たまたま多く焼きすぎただけなんだからな！（涙目＆顔赤らめオプシオン付き）」

「

見ていた数十人（主に女性）は前かがみになったり、鼻血を出して倒れている。

《お次は長年片思いしてきた幼馴染にクリスマスケーキを渡す女の子！》

次はルキアにマイクを向けられた。

「む、私か。……これをお前のために作ったんだ。……よかったら、受け取ってくれないか……？（上目遣いオプシオン付き）」

主に男性陣が身悶えている。

《最後に俺様ドS系でどうだ！》

「俺の作ったケーキが食べないというのか？その口に無理やりねじ込んでやろう（口元歪みオプシヨン付き）」

一部の女性から「ドSktkr……！！」と、聞こえてくる。

《さあさあキュンとした方、萌え！と思った方、ぜひブラッディガーデンのケーキをどうぞ！》

天鎖斬月の宣伝が言い終わると同時にドドドドド……と人の波が押し寄せた。

10分後

店の前には鼻血の痕が点々と付いていてまさにブラッディガーデンと化していた。

そして……

「完売した……」

「意外と楽しかったぞ」

「もういやだ俺泣きたい」

それぞれ違った感想を述べる。
そこへ白崎がやってきた。

「おーおーがんばったじゃねえか。ごくろーさん。……って一護どうした。元気ねえな」

「まあ、そつとしいてやってください」

「原因はこれだろう」

天鎖斬月が持っているのはボイスレコーダー。
ぽちっと押すと……

『お、お前のために作ったんじゃないんだ』『ぎゃあああああああ
ああああ！！』『』

一護のツンデレセリフが流れた。

「おー、見事なツンデレだなあ」

「心配するな。今から『ブラッディガーデン・モバイル』で配信する」

「なにそれ心配しかできない！」

五人で雑談(?)うをしていると店の中から斬月が出てきた。

「今日はすまなかったな。正直かなり助かった」

「いえ、こちらこそありがとうございました」

三人はお礼を言って帰ろうとすると天鎖斬月は一護の服のすそをひっぱった。

「もう帰るのか？」

「ああ、まあな」

辺りはすっかり暗くなっている時間帯。これ以上暗くなれば歩くのも危険になってくるだろう。

しかし天鎖斬月は離そうとしなかった。

「うーん……どうしたものか」

三人が困っていると白崎が助け舟を出した。

「天鎖、そいつらにも事情があるんだ。離してやれ。」

……それに、そいつらの所になら俺がいつでも連れて行ってやるよ」

「……………！本当か！」

天鎖斬月は白崎の言葉を聞いたとたん、目を輝かせて服を離した。

「おう！いつでも来いよ！」

「楽しみにしているぞ！」

「……………あの販売術を教えてくれ」

三人也大歓迎の様子。

「じゃあ、またな！」

「……………ああ、今度必ず行く」

そういつて三人と白崎一家は別れた。

翌日

お昼休み、三人は教室で食べていると、誰かのケータイが鳴った。

『お、お前のために作ったんじゃないんだからな！た、たまたま多く焼きすぎただけなんだからな！』

ピッ

「む、私か」

なにもなかったかのようにルキアはケータイを取る。
教室は静寂に包まれていた。

「て、てめえルキアアアアアアアア！なにしてくれてんだ
！」

「はて、なんのことやら」

「とぼけんじゃねえ！何で昨日のアレを着信音にしてんだ！そして
何で最後まで流してから取る！？」

「そんなもの個人の自由だろう」

一護は顔を真っ赤にして抗議、ルキアは半笑いで受け流している。

『お、お前のために作ったんじゃn「次はお前かアアアアア！」』

」

次に鳴ったのはウルキオラのケータイだった。

「いいだろう、別に。白崎さんに聞いたら昨日の今日で10000
アクセス以上いつてるらしいぞ」

「うれしくねーよ！！……もう嫌だ……恥ずかしくて死ねる……」

「「まあまあ」」

「お前らなんか嫌いだバカヤロー！！」

バカヤロー……バカヤロー……ヤロー……ロー……

一護の悲痛な叫びが学校中に響いた。

バイトを手伝え（後書き）

久しぶりにパソコン触って腕がつりそうです……（ピクピク）

クリスマスまでに書いて少し安心。

天鎖斬月大好きだよ！かわいいよあの子！

原作の一護への思いはジーンときた。

ツンデレは好物なんですけど、こんな感じなのかな？
もし違ったら教えてください！

私もあのボイス（森田c.v）欲しい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3501w/>

ですっとダンス

2011年12月20日16時47分発行